東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

表現者たちの戦争体験：霊性の観点からの一粗描

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部 公開日: 2024-02-07 キーワード (Ja): 三浦綾子, やなせたかし, 遠藤周作, 五木寛之, 水木しげる キーワード (En): MIURA Ayako, YANASE Takasi, ENDO Shusaku, ITUKI Hiroyuki, MIZUKI Sigeru 作成者: 宿谷, 晃弘 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000198

東京学芸大学紀要　人文社会科学系　**75**: 163－170，2024

表現者たちの戦争体験

―― 霊性の観点からの一粗描 ――

宿　谷　晃　弘*

法学・政治学分野

（2023年8月30日受理）

要　旨

15年戦争における戦争体験は，戦後日本の思想的原風景を形成したことは周知の通りである。本稿では，このことを踏まえた上で，戦争体験と表現者たちの作品・創作活動との結びつきを霊性の観点から粗描することを試みる。戦後思想では霊的次元との交錯に基づく実存や国家社会の直視が一定の役割を果たした。そこで本稿は戦後思想の心象風景の掘り起こし作業の一環として，戦争体験を経た表現者たちの作品・創作活動を霊性の観点から見詰め直していく。本稿では，手始めに三浦綾子，やなせたかし，遠藤周作，五木寛之，水木しげるについて上記の作業を試みていく。

キーワード：三浦綾子，やなせたかし，遠藤周作，五木寛之，水木しげる

1．はじめに

1945年の敗北に際して，釈迢空こと，折口信夫は次のような詩を作った。

「神こゝに　敗れたまひぬ―。／すさのをも　おほくにぬしも／青垣の内つ御庭の／宮出でゝ　さすらひたまふ―。　くそ　嘔吐（タグリ）　ゆまり流れて／蛆　蠅（ハヘ）の，集（タカ）り　群起（ムラダ）つ／直土（ヒタツチ）に―人は臥（コフ）い伏し／青人草（アヲヒトグサ）すべて色なし―。（後略）」（折口1975：322）

「神　やぶれたまふ」と題されたこの詩は，敗戦の衝撃を歌い上げてあますところがない。折口にとってこの戦いはまさに神のいくさだったのであり，したがってまた敗戦も神の敗北だったのである。それゆえ，折口にとって敗戦は単なる人間的な危機に止まらなかった。それはまさに大日本帝国の根底を揺るがす霊的な危機だったのである。この認識を胸に折口は，戦後，精力的に神道再生の道を探っていく（斎藤2019：307-318）。

折口とはまったく別の立場から敗戦を受け止めたのが矢内原忠雄である。矢内原は戦時下において預言者としての自覚をもとに筆禍事件の渦中の人となり，東京帝国大学を追われた。矢内原は敗戦を受けて哀歌という詩を作り，大日本帝国に対する神の怒りを次のように歌い上げている。

「（前略）神よ，我らは罪を犯し我らは背きたり，／汝之を赦し給はざりき。／汝震怒をもてみづから覆ひ，／我らを追攻め，殺して憐まず，／敵は皆我らに向ひて口を張り，／恐懼と陥穽我らに来れり。（後略）」（矢内原1946：59）

戦後，矢内原はキリスト教の信仰をもとに平和国家のナショナリズムを唱道した（赤江2017：180-201）。

折口も矢内原も，霊的な次元から敗戦を歌い，あるいは語った。また，折口らとは一線を画しつつ，民主主義的な政治的共同体の市民宗教という観点から橋川文三や安田武らは思想としての戦争体験論を主張した。橋川や安田は，確固たる信念や原理を持たずに事象の推移に応じて右往左往する日本人および日本社会を根底的に変革するためには，「巨大な国家的変革が

＊　東京学芸大学 社会科学講座 法学・政治学分野（184-8501　東京都小金井市貫井北町4-1-1）

ひきおこされた意味でも，人間の信条体系の急激な転換が行われた意味でも」（橋川1959：30）特異な事件である15年戦争とその敗北の体験に個々人が深く沈潜する必要性を力説した。橋川や安田にとって，戦争から受けた苦悩よりも，戦前戦中の国家主義も戦後の民主主義もその根は同じであり，状況の変化に応じていかようにも変化することの方が問題であった。それゆえ，橋川や安田は，戦争と敗北の体験を安易に一般化するのではなく，ヨーロッパがイエスの死と深く向き合う中で福音の原理を獲得したように，取返しのつかない「死者の死そのものを問いつめること」（安田1963：141-142）からはじめることによって単なる理論や舶来品としての「思想」，あるいは情勢に応じていかようにも変化するご都合主義ではなく，個々人の人格の深みから個々人の認識・決断と行動を支える思想を獲得することを主張したのである。

このように15年戦争とその敗戦は，広い意味での霊性の観点から惨禍を深く受け止め，借り物や飾り物ではない新たな生き方や政治的共同体のあり方を探る姿勢を生み出し，あるいは顕在化させた。ここで霊性とは，超越的な次元との交錯の中で実存と向き合う姿勢のことであり，既存の宗教に限定されず，なおかつ死者の死への志向を多分に含むもののことを指す。それらは政治的な次元では相互に対立し，排斥し合う可能性を有し，それぞれの限界を抱えたものであったが，失敗や欠陥と真摯に向き合い，新たな国家・社会を構築していこうとする点では通底していたと言える。だが，今日鑑みるにこれらの姿勢は適切に継承されたとは言い難い。上掲の諸論者についても，誤解や画一的理解の中で忘却され，近年ようやくその見直しが行われている状況にある。それゆえ，諸分野でのさらなる掘り起こしは，戦後の思想的状況をより深く把握する上で欠かすことのできない作業であると言える。

本稿ではそのような掘り起し作業の一環として，小説やマンガ等の表現活動の領域での掘り起しを試みる。もっとも，この小稿では筆者の力量ゆえに対象の取捨選択は限定的かつ恣意的たらざるを得なかった。また個々の対象の分析についても細部にまで立ち入ることはできなかった。この小稿では，ひとまず霊性を共通のキーワードとしつつ，そのキーワードから見える戦後思想の心象風景の粗描が試みられる。

以下では，まず第２章で三浦綾子とやなせたかしの，愛という霊性への賭けのあり方を，次に第３章で遠藤周作の霊性への拘りと遠藤なりのイエス像のあり方を，次に第４章で五木寛之の，どうしようもない根無し草をも包摂する存在の希求を，次に第５章で水木しげるの素朴な精霊信仰への拘りを概観していく。そして第６章で，以上の記述から垣間見える戦後の思想的心象風景について若干の考察を加えていく。

２．愛への賭け：三浦綾子とやなせたかしの場合

戦争体験を愛への賭けにまで高めた人物として，三浦綾子とやなせたかしを挙げることができる。その表現方法，世間的評価，依って立つところ，そして到達した認識における違いはあるかもしれない。だが，霊的な次元における愛に賭けることで戦争体験への応えを見出していった点で，両者は確かに同種の表現者なのである。以下，それぞれについて粗描を試みる。

２．１．人間の罪と神の愛

三浦綾子の出発点に，軍国主義教育の担い手の一員として何の疑問も持たずに天皇の赤子の育成という任務にまい進していた自分への絶望があることはよく知られている。その絶望は三浦をして教職から退かせ，同時に２人の男性と婚約させたりした。このような体験を経て三浦は人間の罪を深くえぐり出す作品を世に送り出している。

だが，三浦の作品には不思議と明るさがある。例えば，『氷点』と同時期に発表された『雨はあした晴れるだろう』には，「人を傷つけるより傷つけられたほうがいいのだ。わたしは，自分の人生に高い目標を持って生きる元気がでてきたようだ」（三浦1998：57）等という主人公の独白が見られ，人間の罪に対する取り組みだけでなく，それを踏まえた上での爽快な心情の発露に圧倒される。この作品がジュニア向けに書かれたことを差し引いても，三浦の文学は基本的に明るく，真摯である。その明るさ，真摯さは，三浦本来のものであり，そのために軍国主義教育の担い手であったという事実は三浦を強く苛んだ。三浦はその真摯さゆえに誰よりも深く絶望し，神の愛によって再生したのである。

このような立場から三浦は，国を愛するとはどういうことかと問いかける。三浦は，「国を愛する心」という文章の中で「国のすることだから，何でもよしとするのは，国が大事なのではなく，自分が大事な人間のすることです」（三浦2016：17-18）と喝破している。三浦は戦時下において戦争を否定し，国策を否定した人間こそ「真の愛国者」であったとするのである（三浦2016：17）。そして，同じ立場から，例えば教科書裁判についても，「私も日本人，日本を愛する思

いは，戦中に勝るとも劣らない。が，過ちを過ちとしない限り，幸いな次代をもたらすことはできないと思うのである」（三浦2016：33）とし，中曽根の「不沈空母」発言についても，「日本の国土に住む国民の命の安全など，一顧だにしない発言」であり，「防衛の名をかりた亡国的発言」であると評している（三浦2016：62）。

三浦にとって愛国心と信仰は矛盾するものではなかった。三浦は，「天国に籍を持つ私たちクリスチャンも，肉においては日本に国籍を置くもの」だから「日本の真の幸福を願うことには，決して人後に落ちないつもり」であり，「だからこそ，私は日本が再び軍国日本になること，神国日本になること，戦争を賛美することに，耐えられない」のだとする（三浦2016：40）。

以上のように三浦は積極的に片棒を担ってしまった戦争体験を神の愛によって乗り越え，人間の罪を見据えながら神の愛に一途に応える人々を描き，国家社会の問題にも発言をしたのである。

２．２．弱いヒーロー・アンパンマン

アンパンマンは実のところかなり弱いヒーローである。顔が汚れたり，濡れたりすればたちどころに力を失う。勇気の花のエキスがなければその力を発揮することができない。自分の顔の修復を完全に人（ジャムおじさん）に頼り切っている――等々，その弱さを挙げればきりがない。そして，それにもかかわらずがむしゃらに人助けに奔走する。幼い子供のヒーローだからと言えばそれまでであるが，馬鹿の一つ覚えと言えなくもない。アンパンマンを見ていると，次のような疑問を禁じることができない。つまり，アンパンマンは何故ここまで弱いヒーローとして描かれなければならないのか，と。

ちなみに，アンパンマンは，その初期から弱いヒーローであった。その理由は，やなせのエッセイから明らかなように，（やなせの性質もさることながら）その戦争体験にあったと言ってよい。やなせは，そのエッセイの中で自身の戦争体験を語った上で，アンパンマンの原点について次のように述べている。

「ぼくは優れた知性の人間ではない。何をやらせても中ぐらいで，むつかしいことは理解できない。子供の時から忠君愛国の思想で育てられ，天皇は神で，日本の戦争は聖戦で，正義の戦いと言われればそのとおりと思っていた。正義のために戦うのだから生命をすてるのも仕方がないと思った。／しかし，正義のための戦いなんてどこにもないのだ。／正義は或る日突然逆転する。／正義は信じがたい。／ぼくは骨身に徹してこのことを知った。これが戦後のぼくの思想の基本になる。／逆転しない正義とは献身と愛だ。それも決して大げさなことではなく，眼の前で餓死しそうな人がいるとすれば，その人に一片のパンを与えること。これがアンパンマンの原点になるのだが，まだアンパンマンは影もかたちもない」（やなせ1995：61）。

やなせは，自身も書いているように人気作家としては遅咲きの人である。代表作のアンパンマンが人気者になりはじめたのは1983年頃というからやなせが64歳頃のことである。もちろん，それまでもやなせは様々な仕事をしており，食い詰めていたわけではまったくない。だが，自分自身の表現が得られないことに強い不全感を抱いていたようである。アンパンマンはそのようなやなせの中にひっそりと宿り，「やけこげだらけのボロボロの，こげ茶色のマントを着て，ひっそりと，はずかしそうに登場」（やなせ1995：170）した。戦争体験を経たやなせにとって，正義のヒーローは自信に溢れた偉そうな存在ではいけなかった。やなせ曰く，「正義は勝ったと言っていばっているやつは嘘くさいんです」（やなせ2013：122）。そして，正義のヒーローは友達を巻き込まずに自分の責任でその正義を行い，その傷を引き受け，誰にも感謝されずにひっそりと去っていく（やなせ2013：126）。だからこそ，「愛と勇気だけが友達」なのである（やなせ2013：123）。

やなせは三浦のようにキリスト教を背景として愛を語るわけではない。だが戦争体験から得られた愛のヒーローへの確信は信仰のごとき強靭さを持っている。その点でやなせは紛れもなく霊性の表現者であったと言ってよい。

３．同伴する霊性：遠藤周作の場合

三浦ややなせほど鮮烈に，あるいは「無邪気」に愛への賭けを試みることもできず，さりとて愛から離れることもできない中で二重にも三重にも屈折した作品を残した人物として遠藤周作を挙げることができよう。その遠藤もまた戦争体験をその作品に反映させた表現者であった。三浦ややなせのように愛に魅かれながら，遠藤はそこに直に没入することができない。そして，愛のまわりをうろつきながらようやくたどり着いたイエスの姿はアンパンマン以上に弱々しいものであった。以下，その粗描を試みる。

遠藤の戦争体験が色濃くにじみ出ている作品のひとつに『海と毒薬』（遠藤1958）がある。その主人公勝

呂は米兵捕虜の生体解剖事件に連座し，すべてを失う。しかし，勝呂はこの事件に主体的に関与したわけでもなく，肝心の場面においては壁にもたれているばかりで何もできなかったのである。勝呂は何故，生体解剖への参加を拒絶しなかったか。作品中，同僚が指摘しているように，勝呂は断ろうと思えば断ることができた。それにもかかわらず勝呂は断らなかったのである。だが，それもまた勝呂の主体的な選択とは言えない。それはむしろ深い失望と疲労からの消極的な自殺行為にも似たものだった。勝呂ははじめて担当した患者を助けることができなかった。人が無意味に死んでいく状況の中で勝呂はこの患者を助けることに拘っていた。それだけに患者の死亡は勝呂に深い失望をもたらしたのである。

遠藤は『悲しみの歌』（遠藤1977）で最終的に勝呂を自殺させている。人生に失望し，かつての犯罪行為ゆえに行く先々で石もて追われ，正義感に駆られた新聞記者に筆誅を加えられ，無償の奉仕をしていた患者を助けられないどころかその哀願により患者を死なせ，またそのことで責められる――しかし，諸々の出来事は勝呂にとって決定打とはならなかったのかもしれない。勝呂ははじめての患者を亡くした時，この国の歪みと医師の理想に敗れて疲れ果てていたのである。

遠藤が描くイエスは，この勝呂をも他の登場人物をも救うことができない。ガストンという，底抜けにお人よしの放浪者の姿で来臨しながら，イエスは誰をも救うことなく，勝呂たちの悲しみの周囲をウロウロするだけである。それでもガストンこと，イエスは手を差しのべることをやめない。結局のところ，止められなかったにせよ，イエスは勝呂の自殺の瞬間まで勝呂に手を差しのべ続けたのである。

このようなイエス像を遠藤はすでに『死海のほとり』（遠藤1973）において描き出している。『死海のほとり』の語り手は，かつて学生たちに「ねずみ」と呼ばれ，ナチの収容所で死んだコバルスキという修道士の最期を知ることに執着している。その語り手に対して，「ねずみ」と同じ収容所にいて「ねずみ」の最期を目撃した人物が手紙で詳細を教えてくれる。その手紙には，こう書いてあった。

「その時，私は一瞬――一瞬ですが，彼の右側にもう一人の誰かが，彼と同じようによろめき，足を曳きずっているのをこの眼で見たのです。その人はコバルスキと同じようにみじめな囚人の服装をして，コバルスキと同じように尿を地面にたれながら歩いていました……」（遠藤1973：345）

神は沈黙しているという苦悩は，遠藤周作という表現者の中で永遠の同伴者としてのイエスというイエス像を生み出させた。愚かで醜く，苦しみにあえぐ人々を裁くのではなく，そのような人たちとこそ，伴にあるイエス。無力で滑稽ですらあるが，決して人々を見捨てないイエス。そして，遠藤は，そのイエスが，愛がキリスト教という形をとることへの執着からも自由であることを『深い河（ディープ・リバー）』（遠藤2021）において示している。それこそが，戦争という過酷な体験を経てなお，愛に拘り続けた表現者の到達した地点であった。

4．摂取を夢見る漂泊者：五木寛之の場合

五木寛之が「外地」からの引揚者の一人であることはよく知られている（小林2019）。もっとも，五木は，その体験それ自体を安易に作品化することを否定している。五木は，引き揚げについて若い頃，記憶を残すために取材を重ねたことがあるが結局，その計画をあきらめざるを得なかったという（五木2021：20-21）。何故なら，饒舌に語ってくれる人の話は「他人の体験と自分の体験がごちゃ混ぜになっていて，繰り返し何度も人に話しているうちに，起承転結のよくできた物語になってしまって」おり，「本当に大変だったはずだと目星をつけた方はほとんど話して」くれなかったからである（五木2021：21）。五木は，それは自分も同じことだとする。本当に大変だった人たちが「なぜ語りたくないか」，それには様々な理由があるだろうが「たぶん，それは自分たちが一方的に被害を受けたわけではないからかも」しれないと，五木は自分の体験を振り返りつつ述べている（五木2021：22）。

だが，五木はそれでも自分の戦争体験を折に触れて語っている。忘れたくても忘れられないのである（五木2021：25-26）。五木の語りは多岐にわたるが，「内地」を故郷と思えずむしろ朝鮮こそが故郷のように感じられること（五木1972：95-99），敗戦と母の死（五木2003：19-22），生き残るための「人身売買」への加担（五木2021：24-25），逃走途中での妹の放置（五木2013：15-22）等，枚挙にいとまがない。これらの体験は，五木をして根無し草というだけでなく，悪人，「人間として許されざる者」（五木2021：26）という意識を植え付けた。

時代に翻弄されるだけの根無し草，人間の生死の儚さは，ハードボイルド風の作品にも深く刻み込まれている。例えば，『戒厳令の夜』（五木1978）において主人公は，たまたま一枚の絵を見つけたことから平凡な人生から引き剥がされ，様々な冒険を経た上で古代

の海人族の末裔というアイデンティティを「発見」させられ，山人族の末裔だったことが判明した恩師の娘とともに日本を脱出してチリに逃亡する。しかし，軍事クーデターに巻き込まれ，多くの人たちとともに無念の死を遂げる。ちなみにこの物語には超人的な力をもつ人間が多数登場する。しかし，結局のところ，その人間たちもまた，運命のなすがままにあえなく命を落とすのである。

戦争体験の傷は五木を苛み続けているようである。五木は作家業をいったん休業し，龍谷大学の聴講生となって親鸞等について学ぶ。そして，作家業を再開した五木は，親鸞や蓮如について精力的に語り，小説を発表していく。五木は自分のものの見方はどこか歪んでいるだろうが，「歪んだ鏡に正しい像は映」らないとする（五木2005：22)。戦争体験を通じて歪められた人間を，それでも，いやそれがゆえに救い上げてくれる存在がいるのだとしたら，人はその手に縋ろうとせざるを得ないだろう。もちろん，親鸞の教えには一定の危険性もあり，真宗の負の歴史もある（中島2017)。そして，五木もそのことに無自覚ではない（五木2021：146-149)。それでも，戦争体験を通じて，「国家と同じように，自分たちを安易に信用しない，という一点だけでも大切にしてゆきたいと思っています」（五木2005：226）と述べる五木にとって，摂取不捨の手はその非国家的あり方をそのまま受容してくれる原理そのものなのである。

5．したたかな霊性のエンターテイナー：水木しげるの場合

水木しげると言えば霊性というよりも幽霊や妖怪というキーワードの方がしっくりくるかもしれない。しかし，水木は紛れもなく霊性の表現者であり，その性質は彼の戦争体験・戦後体験と密接に結びついていた。

ちなみに，水木については，反政治・反資本主義の平和主義者，虚無主義者，あるいは現実主義者との両極端な評価が存在する（山本2023：66)。例えば，貸本版やガロ版の『悪魔くん』（水木2010；同1988）や『総員玉砕せよ！』（水木2022）等のマンガ，あるいは『水木しげるの娘に語るお父さんの戦記』（水木1995b）等のエッセイを読めば，反政治・反資本主義の平和主義者という印象を抱くかもしれない。また例えば，貸本版の『墓場鬼太郎』の「あほな男」（水木1997：5-134）や「紙魚」（水木1995a：213-220）等のマンガを読めば，虚無主義者という印象を抱くかもしれない。そして，「雨女」（水木1995a：197-212)，「いぼ」（水木1995a：313-320）等のマンガを読めば，現実主義者という印象を抱くかもしれない。もっとも，こういった単純な位置づけが難しい作品も少なくない。例えば，『劇画ヒットラー』（水木1990）はヒットラーの狂気を淡々と描いていて，平和主義の作品にも見えるし，それだけでは収まらないものも感じさせられる。このように水木しげるは，見る角度に応じて様々な像を結ぶ表現者である。

だが，どのような水木しげる像を思い描くにせよ，この表現者もやはり戦争の刻印を色濃く受けていることは否定できない。例えば，鬼太郎に出てくる有名なビンタは，まさに戦中の水木の体験を反映している。そうした細々とした例だけでなく，そもそも様々な水木像から窺われる怒りや虚無感，生き延びていくための現実主義は，戦中戦後の過酷な経験をくぐった者のそれである。例えば，戦場で無意味な犠牲を強いられ，戦後帰国した後も貧乏に苦しめられていることへの怒りは『悪魔くん』（水木2010；同1988）や『総員玉砕せよ！』（水木2022）に結晶化し，戦中戦後の生の無意味さ・過酷さの実感から生じた虚無感は貸本時代の「あほな男」（水木1997：5-134）に結実しているだけでなく，人気漫画家になった後も水木の中に巣食い，「帰って来た男」（水木2006：117-132）等に結実している。そして，その評伝（足立1994）等から窺われる水木のしたたかさは，怒りや虚無感をも作品に昇華させて水木の社会的地位を確固たるものにしていったのである。

それでは，したたかで現実主義的な表現者水木にとって幽霊や妖怪は単なる飯のタネに過ぎなかったのだろうか。答えは然りであると同時に否である。水木にとって表現活動は生きていくための術であると同時に存在意義でもあった。水木は若い頃から大芸術家になりたかった。ただし，水木はいわゆる芸術家に収まるには世俗的過ぎる人間であったが，世俗に徹するには表現し続けることに拘り過ぎる人間でもあった。それは例えば水木の作品の緻密な背景描写からも窺われる。ただ単に世俗的に成功したいだけであったら，背景などはある程度のレベルで留めておいてよかったであろう。しかし，水木はそうしなかった。そこに表現者としての拘りがあったのである。そして霊的なものは，水木の表現活動を支えるエネルギーであった。水木にとって霊的なものは，安逸感をもたらしてくれるものであり（夏目1997：54)，それを描けるからこそ表現者である意味があったのである。

もっとも水木は霊的次元との交錯に単なる表現活動

以上の意味を付与しようともしている。例えば，水木は，『木槌の誘い』（水木2014）や『水木しげるの古代出雲』（水木2012）等で水木のルーツでもある出雲族の霊や超古代の神との交信を描き，素朴な精霊に身をまかせることの重要性を世に知らしめることを精霊から任されたとする。ここまで来るともはや眉唾物のようにも感じられるが作者本人はいたって真面目のようでもある。

いずれにしても水木は，最終的に素朴な精霊信仰の復活を主張する。ここで，水木の言うところの精霊とは，文明が生じる前に人々によって感じられ，崇められていた霊的存在のことである。例えば『木槌の誘い』で縄文世界に水木たちを案内する「妖怪」たちは，水木に対して「あんたの描いた妖怪は我々の神だった」，「縄文はすべて精霊信仰だった」のであり，「あなたの世界ですヨ」と語りかけている（水木2014：341）。水木において霊的存在は，民間伝承に出てくる物の怪や水木自身が描く妖怪よりも，霊性において純度の高いものに「昇格」していったようである。そして，それは，戦中戦後の，ひたすら走り続けさせられる無意味な生への反発でもあり，それでも自分の進む道をしたたかに守り続けた水木自身のあり方を肯定するものでもあったである。

6．若干の考察

本稿で概観してきた表現者たちの戦争体験が各人各様であるのと同様に，そこから生じてきた霊性との切り結びも実に様々である。

例えば，三浦とやなせの霊性との切り結びは，愛との一体化である。もっとも，三浦のそれが天上にまします神との関係において生じる，極めて原理的なものであるのに対して，やなせのそれはより体感的なものであり，人と人との対面の中で相手の憐れさに突き動かされて生じてくるものという違いがある。

また遠藤における霊性との切り結びは一体化ではなく，神の沈黙から生じる迷いや疲労とそれにもかかわらず持続する執着の果てに垣間見える愛の姿への思慕であると言える。これは，やなせにおけるアンパンマンへの思い入れと似ているが，遠藤におけるイエスは下手をすると，アンパンマンよりも頼りなげである。もっとも，三浦における霊性が厳格な父的匂いのするものであるのに対して，遠藤とやなせのそれは寄り添い，支える母的なものと言える。この点で，どこまでも歪んだものをこそ摂取し，不捨であるところの，五木における霊性も，母的な要素が強いように感じられる。

そして，水木における霊性との切り結びはより感覚的なものが強い。妖怪にしても精霊にしても，水木において霊的存在は，愛や慈悲のような特定の原理とは無縁のものであると言える。それは，「そこにあって」人々を安堵させ，時には人々の歌に共振して姿を現すものであった。

以上のような違いはあるにしても，本稿で取り上げた表現者たちの霊性にはひとつの共通点である。それは，戦争において顕在化したところの，いまも昔も変わらない国家社会のあり方およびその中で生きる我々自身のあり方に対して，強烈な違和感を突きつける点である。これこそ，過酷な戦争体験から表現者たちが感じ取り，学び取ったものであったのである。

7．おわりに

本稿では三浦・やなせ・遠藤・五木・水木の５人の表現者を通じて，表現者と戦争体験との切り結びを霊性の観点から粗描した。単に事例を積み上げればよいと言うわけではないが霊性の観点からの分析として不十分さ・不完全さは否めない。今後，分析の範囲を拡大するとともに各々の表現者の分析をさらに深めていくことにしたい。

引用文献一覧

足立倫行（1994）『妖怪と歩く　評伝・水木しげる』（文藝春秋）

赤江達也（2017）『矢内原忠雄：戦争と知識人の使命』（岩波新書）

遠藤周作（2021）『深い河（ディープ・リバー）　新装版』（講談社文庫）

同（1977）『悲しみの歌』（新潮文庫）

同（1973）『死海のほとり』（新潮文庫）

同（1958）『海と毒薬』（新潮文庫）

五木寛之（2021）『私の親鸞：孤独に寄りそうひと』（新潮選書）

同（2013）『人間の運命』（角川文庫）

同（2005）『他力』（幻冬舎文庫）

同（2003）『運命の足音』（幻冬舎文庫）

同（1978）『新潮現代文学72　戒厳令の夜・黄金時代』（新潮社）

同（1972）『風に吹かれて』（新潮文庫）

橋川文三（1959）「日本近代史と戦争体験：歴史意識の問題を中心に」橋川文三ほか『現代の発見第２巻　戦争体験の意味』（春秋社）所収

小林瑞乃（2019）「『記憶』を語るということ：『外地引揚派』五木寛之の言説をめぐって」年報・日本現代史（24），pp.67-104
三浦綾子（2016）『国を愛する心』（小学館新書）
同（1998）『雨はあした晴れるだろう』（角川文庫）
水木しげる（2022）『総員玉砕せよ！　新装完全版』（講談社文庫）
同（2014）『水木しげる漫画大全集084　木槌の誘い』（講談社）
同（2012）『水木しげるの古代出雲』（角川文庫）
同（2010）『貸本まんが復刻版　悪魔くん』（角川文庫）
同（2006）『水木しげるのニッポン幸福哀歌（エレジー）』（角川文庫）
同（1997）『貸本まんが復刻版　墓場鬼太郎6』（角川文庫）
同（1995a）『幻想世界への旅　妖怪ワンダーランド』（ちくま文庫）
同（1995b）『水木しげるの娘に語るお父さんの戦記』（河出文庫）
同（1990）『劇画　ヒットラー』（ちくま文庫）
同（1988）『悪魔くん千年王国（全）』（ちくま文庫）
中島岳志（2017）『親鸞と日本主義』（新潮選書）
夏目房之介（1997）『マンガと「戦争」』（講談社現代新書）
折口信夫（1975）『折口信夫全集第廿三巻　作品3　詩』（中公文庫）
斎藤英喜（2019）『折口信夫：神性を拡張する復活の喜び』（ミネルヴァ書房）
山本昭宏（2023）『残されたものたちの戦後日本表現史』（青土社）
矢内原忠雄（1946）『日本精神と平和国家』（岩波新書）
やなせたかし（2013）『わたしが正義について語るなら』（ポプラ新書）
同（1995）『アンパンマンの遺書』（岩波書店）
安田武（1963）『戦争体験：1970年への遺書』（未来社）

Bulletin of Tokyo Gakugei University, Humanities and Social Sciences, 75: 163 – 170, 2024

War Experiences of Creators:

Rough Sketch from the Viewpoint of Spirituality

SHUKUYA Akihiro*

Law and Politics

(Received for Publication; August 30, 2023)

Abstract

War experiences in the Asia-Pacific War formed the archetypal scene of thought of post-war Japan. In this article I try to sketch roughly the relation between war experiences of creators and their works・creative activities. In post-war thought in Japan, confronting boldly of existence and state・society from the point of view of spirituality looking straight played a constant role. So I analyze works・creative activities of creators who survived the Asia-Pacific War from perspective of spirituality. This work is part of digging of image scenes of post-war thought. In this article, I begin with analyzing MIURA Ayako, YANASE Takasi, ENDO Shusaku, ITUKI Hiroyuki, MIZUKI Sigeru.

Keywords: MIURA Ayako, YANASE Takasi, ENDO Shusaku, ITUKI Hiroyuki, MIZUKI Sigeru

* Tokyo Gakugei University (4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan)